

一 日本古代史と鞠智城

笹山 晴生

ただ今御紹介いただきました、笹山です。このシンポジウムが開催されました趣旨は、近年著しく進みました鞠智城跡の発掘調査の成果を遠く離れております東京の方々に広く御紹介すること。それと共に、発掘調査の過程で出てきましたさまざまな問題点について皆様からいろいろ御意見をいただき、それを今後の調査や遺跡の保存に役立てたいということ。そういう趣旨でございまして、昨年七月に第一回を開きました。当日は、この同じ会場で、たくさんの方がお見えになり、熱心に基調講演、発表、パネルディスカッションをお聞きいただき、多くの成果があがったと考えております。昨年のシンポジウムの成果につきましては、近日書物として出版が予定されております。

私は、さきほど御紹介がありましたように、日本の古代史を専攻しておりますが、また史跡や文化財保護関係の委員も務めており、殊に、熊本と近い福岡県の大宰府の調査研究のための委員を長年務めております。今日は、大宰府の、福岡県立九州歴史資料館の館長をしていらつしやる西谷正先生もお出でになっております。そんな関係で、鞠智城とはいろいろと係わりが深く、前から関心を持っておりました。今日は、この後、東アジアとの関係に焦点をあてて、基調講演につづけて発表、

パネルディスカッションが予定されておりますので、私の講演では、昨年のシンポジウムの成果を踏まえ、簡単に日本の古代史と鞠智城との係わりをみていきたい、と考えております。時間が限られておりまして、少し話が飛んでいく恐れもありますが、よろしくお願いいたします。

一 鞠智城の建設と七世紀の東アジア

先ほどの知事さんの御挨拶にもありましたように、鞠智城は熊本県北部の山鹿市を中心に、一部は菊池市にかかりますが、そこにある古代の山城の一つであります。いつできたか、につきましては、実は文献には書かれていないのであります。最初に文献に出てきますのが、西暦の六九八年、文武天皇二年の条の『続日本紀』という書物に「大宰府に命じて、大野、基肄、鞠智の三つの城を修繕させる」という、修繕の



写真 1 講演中の笹山晴生氏

記事であります。ここに出てくる大野城は筑前国、福岡県に、基肄城は肥前国、佐賀県にある山城で、六六三年の所謂「白村江の戦い」の直後に造られたことが『日本書紀』に出てまいります。その大野城・基肄城と並んで鞠智城が出てきて、その三つの城を修繕させるというのですから、鞠智城は、おそらく大野城や基肄城と同じ時期、七世紀後半の「白村江の戦い」の後に作られた山城ではないか、と想像されるのであります。

その鞠智城の遺跡は、以前から推定されておりましたけれども、近年、熊本県の手で発掘調査が目覚しく進み、土塁や水門、倉庫、役所の跡等々、さまざまな遺構が判明してまいりました。全体の構造が明らかに、それを見ますと、大野城とか、基肄城、それから対馬の金田城などと共通する、やはり朝鮮式の山城であることがはっきりしてまいりました。その発掘調査の結果として、二〇〇四年、平成一六年に国の史跡に指定されました。その前後にわたって、建物の復元とか、史跡としての整備が熊本県の手で進められております。最近の成果につきましては、後で矢野裕介さんの「鞠智城の調査成果とその歴史的意義」という御報告がありますので、そちらをお聞きいただきたいと思ひます。

鞠智城は七世紀の後半に造られたと思われるわけですが、こういった事情でこういう朝鮮式山城が九州に造られたのか。その点が今日のシンポジウムの主たる課題でありまして、これから後の講演や発表の中で、いろいろとお話が出てくるかと思ひます。七世紀の東アジアは非常に激しい動乱の時期で、中国に唐という大帝國ができ、その圧力が周辺に及ぶ。そして朝鮮半島では、それ以前から存在しておりました、高句麗・百濟・新羅という三つの國がそれぞれに對抗しながら自

国の政治制度を整備していく。そうした時期に当たっています。その中で、西暦の六六〇年、日本では斉明天皇の六年、新羅が唐と結んで百済を攻め、これを滅ぼすということがありました。百済が滅亡した後、百済の遺された貴族・王族たちは唐の軍隊に抵抗し、倭国、当時の日本に軍事援助を求めてきます。倭国は、これに応じて大軍を朝鮮に送り込み、戦争に介入したわけであります。その結果、六六三年、天智天皇の二年、倭国の水軍と唐の水軍とは白村江という所で戦い、倭国の軍隊は大敗し、百済の王族や貴族を伴って、倭国、日本に帰還したのであります。

その後、倭国では、唐や新羅が日本に侵攻してくる恐れがあるということで、急遽そのための防衛の体制を整えた。最前線にあたる対馬や壱岐には、防人、それから烽、これは烽火ですね、敵襲を知らせるための情報伝達施設、そういうものを作る。それから九州の政治軍事の中心である大宰府、その前面には防御施設としての水城を造る。水城は、長い土塁を築き、その前面に堀を掘って敵襲を防ぐためのラインとしたものです。そして大宰府に隣接するところに、大野城とか基肄城といった山城を置く。さらにそれだけではなく、朝鮮方面から倭国の中心である大和、奈良に至るまでの各地に山城を築く。対馬の金田城、長門の長門城、讃岐の屋島城、それから大和と河内、現在の奈良県と大阪府の境にある山城、高安城というものがありますが、その高安城を築くということで山城を築いていったわけです。この山城を築くの中には、日本に亡命してきた百済の王族や貴族、それらの人々の軍事的、土木的な力が利用されました。六六五年には、大野城や基肄城を造るために憶礼福留、四比福夫という二人の百済人が筑紫、九州に派遣されており、この時期の日本の様々な防衛のための施設、軍隊の訓練、兵術、そういったものには、こうした大陸的な兵法に詳し

い百済の王族や貴族が非常に大きな力を果たしたと思われます。

鞠智城は、どのように建設されたのか、残念ながらそれを示す文献は無いのですが、発掘調査の成果によりますと、まさしく大野城や基肄城や金田城などと共通する朝鮮的な山城としての特徴を備えています。おそらく、大野城や基肄城とほぼ同じ時期に、共通する目的をもって建設された山城であろうと考えられます。

問題は、他の山城が九州の北の方、朝鮮半島に向けての動きのための城であり、あるいは九州から大和へ至る瀬戸内のルートに造られているのに対して、鞠智城は少し南の方に位置している。だから鞠智城だけは築城の目的が違うのではないか、とも考えられることです。その点については、肥後熊本県の南の方の有明海の沿岸は、それ以前の六世紀の段階から朝鮮の百済やその他の国々と係わり合いが深く、重要な朝鮮からの文化流入のルートになっていたことが注目されます。その点から言いますと、この鞠智城は南にあるけれども、有明海方面からの外敵の来襲に備えるという目的を持っていた、とも考えられる。先ほどお話がありましたように、平成二〇年、二〇〇八年度の発掘調査で貯水池跡から七世紀の後半と推定される、青銅製の百済系の仏像、菩薩像が出土しました。これは、鞠智城の造営に百済系の技術者が係わっていたことを示唆するものであります。それを証明立るところまでは行かないと思いますが、そういう可能性が出てきたと思います。詳しい、例えば仏像の成分分析ですとか、様式の細かい調査、そういういった調査が今後きっちり進められて、その資料的な価値が確定されることが望まれるしだいです。

二 鞠智城と古代律令制

その後の鞠智城のことについてお話していききたいと思います。

白村江の敗戦という事態は、日本の古代国家に大きな影響を及ぼしました。国家の指導部に深刻な反省を迫ったわけであります。戦争の敗因から、国家が人民をきちんと支配して、戸籍とか計帳とかに登録し、物資や労役を徴発し、兵士を徴発する、そういう唐に倣った中央集権的な体制を作ることが急務と考えられました。そうした動きは、天智天皇が亡くなった後、六七二年におこった壬申の乱という大きな内乱に勝利した天武天皇と、その後の持統天皇の下で推進されていくことになりました。そして、七〇一年、大宝元年、国家制度の基本としての大宝律令という法体系が制定され、そしてその翌年には、それまで「倭」と称していた国が「日本」という国号で遣唐使を派遣することとなったのです。

この時期、東アジアの情勢は、比較的安定の方向に向かっていきました。唐と新羅は、白村江の戦いの後、連合して高句麗をも滅ぼしました。朝鮮半島では、残った新羅が唐の勢力をも排除し、朝鮮半島を統一し、支配するようになりました。東アジアの情勢は、中国の唐と、朝鮮半島の新羅、それから日本列島の日本、この三国の關係として進んでいくようになりました。これは、日本にとっても国家体制を整える上で非常に有利な条件であったわけです。

こうして日本では、中央集権体制としての律令制が成立します。九州は律令制の下では西海道といいますが、西海道はその中でも特異な体制がとられていた。つまり、西海道では、他の五畿七道

といわれる諸道とは異なり、大宰府という役所が置かれ、大宰府が西海道の諸国を統括するという、非常に権力集中の強いシステムが作られたのです。

諸国を結び、早馬が駆ける駅路という陸上交通路がありますが、西海道ではそれが大宰府を中心にして作られ、諸国の国の役所である国衙、郡の役所である郡家、その他の役所の官衙施設も駅路に従って計画的に配置されていくようになります。それから烽、烽火という情報伝達システムがあります。敵が襲来してきた場合に、昼間は煙を上げ、夜は火を上げて襲来を知らせる。現代でも以前にはマイクロウェイブのアンテナがよく山の上にありましたけれども、それと同じように、大きな目立つ山の頂上に烽火台を置き、そこに火を上げると、その火が次の烽火台に伝わり、また次の烽火台に伝わっていく。火の数によってどれくらいの敵が襲来したかが分かるというようになっており、そういう情報が国の役所である国衙とか、大野城・基肄城といった城に伝わる。そういうシステムができました。

例えば、隣の肥前国、佐賀県・長崎県の方では、『肥前国風土記』が残っていて、その烽の数とか、郡ごとの配置とかがわかっています。それを基に、佐賀県・長崎県の方々が、そのネットワークを復元することをされています。肥後国、熊本県の場合には、そういった具体像はわかりませんけれども、鞠智城の場合には、そばに日の岡山という山がありまして、これはおそらく烽、烽火を上げた山だと思われます。他にも「火の山」とか「日の隈山」とか、烽火を上げた土地にはそういった遺称が残っております。おそらく鞠智城もそうした大宰府を中心とする情報伝達のネットワークにつながっていたと考えられます。

それから鞠智城の軍事面での機能はどうであったか、ということですが、西海道、九州の軍事力として有名な制度は防人であります。これは、六六三年の白村江の戦いの直後に、杵岐と対馬に置かれたのが最初でして、律令制の下でもそれは制度として存在し、諸国の軍団の兵士の中から選抜されて三年交替で筑紫に派遣されるようになります。人数は、だいたい二〇〇〇人から三〇〇〇人で、大宰府に防人司という役所が置かれ、そこで防人の配置を決め、守備が行われる、という体制です。この防人は、奈良時代を通じてほとんどが東国、今の中部地方・関東地方出身の兵士でありました。東国はもと大和政権の時代、五世紀・六世紀の時代から、宮廷を守護する舍人^{とねり}などを出す、武勇に優れた土地であると考えられてきました。そのために、そこ出身の精鋭の防人を九州の方に配置した、という制度であつたわけです。ところが、

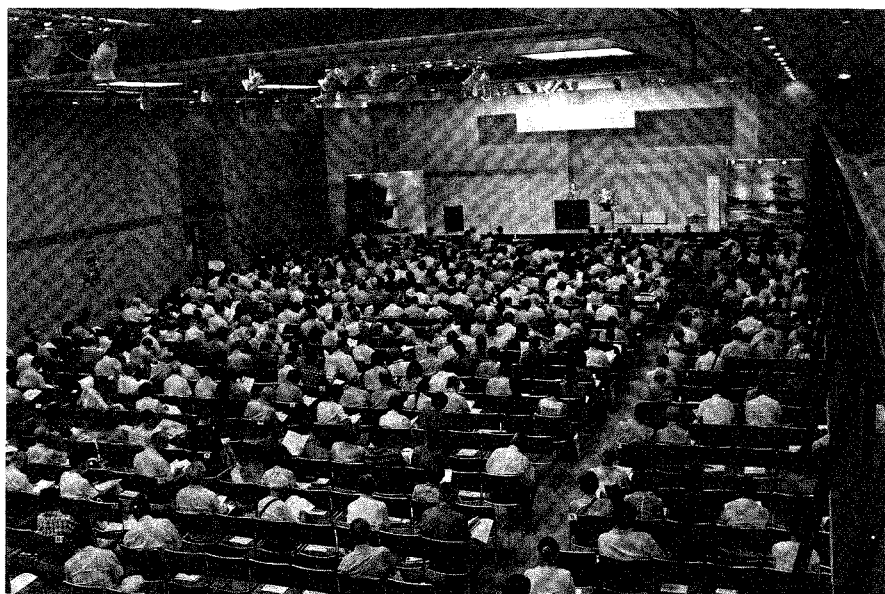


写真2 会場風景(1)

東国の兵士たちは、九州だけではなく、東北地方の蝦夷えみしとの戦いにも「鎮兵」というかたちで派遣されていた。奈良時代の後半になりますと、東北地方に律令制の支配が進んでくるのに応じて、蝦夷の反乱が多く起きます。そうした中で、九州に防人を派遣する余力がなくなり、東北地方の鎮兵の方に重きが置かれるようになる。そのため、九州の防衛に東国から兵士を送る防人の制度は、奈良時代の後半には、停止されてしまうのです。

鞠智城に防人が配置されていたかどうか、これははっきりとはわかりません。防人は、もともと辺境を護るのが任務でありますから、壱岐とか対馬とか、そういった北の海岸地方に多く配置されていたと思われます。鞠智城に防人がいた可能性は、かなり少ないのではないかと。鞠智城の守備に主に当たったのは、肥後国の地元の軍団の兵士ではなかったか、と私は思います。軍団の兵士は、諸国の各戸から二〇歳以上の男子を徴発することになっていて、一つの軍団に一〇〇〇人の兵士が所属する。肥後国の場合、軍団の数はおそらく四つあって、その中で益城ましき軍団の名前だけが知られています。

軍団と山城とはどういう関係にあったのか。大野城の場合には、地元である筑前国の御笠みかさ団、基肄城の場合には肥前国の基肄団。おそらくこういった軍団が城の守衛に当たったと思われます。鞠智城の場合も、おそらく付近に軍団が存在し、兵士の訓練と城の警備に当たった可能性が高いと思われると思います。

三 東アジアの変貌と鞠智城の終末

それでは最後に、その後の東アジアの動きと、西海道、九州との係わりを簡単に申し上げておきます。

奈良時代以降の東アジアと日本との係わり。これは、各国の間で、国を代表する使が往来する。日本の場合でいうと、唐に向かう遣唐使があり、朝鮮の新羅に向けて遣新羅使が行きます。新羅からは、日本に新羅使が来ます。渤海との間の国家間交渉も始まります。対外交渉が極めて頻繁になる。そうした外交交渉の上で大きな役目を果たするのが大宰府であり、それから大宰府の玄関口として、博多湾に面して置かれた筑紫の鴻臚館こうろかんであります。鴻臚館の遺跡は、福岡市の平和台球場の跡から発掘されています。大宰府の、博多湾側の前面には水城という防衛ラインが築かれますが、鴻臚館から大宰府に通じる道は、水城の西門に達します。近年水城の西門の発掘調査が進み、その定期的な推移がわかってきましたが、七世紀の時期の水城の西門は、防御的な機能を重視した、狭くて堅牢な門だったのが、奈良時代の八世紀の前半になると、その切通しが約二倍半に拡大する。門の建物は、瓦葺の建物に変わっている。防御よりもむしろ人や物の流れを重視したものに変わってきている。大宰府の表玄関に相応しい壮麗な門に変わっているわけで、こうしたことも、当時の外交の変化と大いに係わっていると思われます。

その後、平安時代の九世紀以降になりますと、唐が衰え、その結果、唐を中心とする東アジアの政治的な秩序も崩れてきました。また東アジアの諸国にも、いろいろな問題が起きてきます。そう

した中で、九州にとって大きな問題となったのは、新羅の海賊の活動です。朝鮮半島の新羅では、八世紀の末から内乱が起こったり、飢饉が発生したりして治安が乱れ、海辺の住民が海賊になって日本や中国の沿岸に行く、ということが起こりまして、その防備が大きな問題となりました。鞠智城という名前が、七世紀末の修理の記事に続いて史料に出てくるのが、この時期でありまして、鞠智城の兵庫がひとりでに鳴ったとか、鞠智城の不動倉、お米を蓄えておく倉が火災にあったとか、そうした記事がしばしば出てまいります。これは、鞠智城が、肥後国にとって、一つの軍事的な象徴になっていて、そこに起こる、こういう不吉な出来事が何か大きな兵乱が起こる予告ではないか、そのように考えられたことを示すものと思われます。その背景には、当時の大宰府が西海道の豪族や人々の暮らしというものを十分に把握していなかった、という事情があったように思われます。

そういうことで、鞠智城は、九世紀をもって史料からその姿を消してまいります。この頃から、日本をめぐる東アジアの動きは大きく変わっていくわけですね。中国では唐が滅び、宋の時代になります。朝鮮では新羅が滅び、高麗が出現します。これら諸国間の関係も、それまでの政治的な関係から、貿易を中心としたものになる。それに伴って、九州の位置づけも、七世紀の九州は城を築いて守りを固めた九州であったのに対して、この時期になると、東アジアの変化に伴って外に開かれた九州、そういうものになってくるのかと思います。その中で、七世紀の遺構としての鞠智城の果たす役割も終わりを迎えたのではないか、そのように考えるしだいです。

時間がなくて、おわかりにくかったかも知れませんが、「日本古代史と鞠智城」というテーマで、東アジアとの係わりの中での鞠智城の位置づけ、というものを私なりに申し上げました。今日のこ

れからの講演・発表・ディスカッションの成果に期待したいと思います。
どうも御清聴ありがとうございました。